

園芸タイムリー情報

《6月上・中旬版》

令和元年 6月3日発行 第2号
 上川農業改良普及センター
 Tel 0166-84-2017 Fax 0166-84-2009
 E-mail asahi-nokai.11@pref.hokkaido.lg.jp
 HomePage http://www.kamikawa.pref.hokkaido.lg.jp/ss/nkc/index.htm

全作物共通

- 気温は大きく変動することが予測されます。特に晴天時の温度管理には、十分注意してください。
- 晴天時は葉からの蒸散が活発になります。曇天後の晴天時には、しおれが発生しやすくなります。土壌水分の不足には注意しましょう。かん水は根域全体にいきわたるように行い、ベッド内にムラがないか確認しましょう。
 - ハウス内の温度に合わせて換気・遮光資材の設置を行い、生育適温の維持に努めましょう。
 - 曇天や雨天の場合はハウス内の湿度を低下させるため、状況に応じて換気を行い、遮光資材を設置している場合は取り外しましょう。
 - アブラムシ類・ハダニ類・アザミウマ類・コナガ等の害虫の増加が懸念されます。ほ場観察を行い、適期防除に努めましょう。

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用ください。

作物名	あぶらな科野菜全般	
病虫害 生理障害名		
キスジノミハムシ	こまつな葉部食害 ラデッシュ根部食害	
発生状況	発生に注意	
発生時期	6月上旬～	
発生時の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 成虫は葉、幼虫は根の表皮を食害する。 気温の上昇に伴い、6月から発生に注意が必要である。 7月～8月に発生がピークとなる傾向がある。 		
<ul style="list-style-type: none"> ●成虫期間：1～4カ月 ●卵期間：5～7日 ●幼虫期間：10～20日 ●蛹期間：3～15日 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> 成虫の多発時は防除効果が劣るため、ほ場をよく観察し、発生初期防除に努める。 土壌施用剤は、土壌水分が極端に低下すると効果が劣るため、かん水管理に留意する。 ハウス内外の雑草や残さを適切に処分し、発生密度を高めないようにする。 忌避資材（サニーマルチ）の活用（右：写真ハウス下部）。 		
<防除の一例> ●フェース粒剤 4kg/10a は種時全面土壌混和 1回（こまつな） ●カ-9M粒剤 6kg/10a 定植時土壌混和 1回（チンゲンサイ） ●E光700顆粒水溶剤 4,000倍 収穫7日前まで 1回（チンゲンサイ・ターサイ・みずな・こまつな）		

作物名	あぶらな科野菜全般	
病虫害 生理障害名	コナガ成虫	
コナガ		
発生状況	発生に注意	
発生時期	6月上旬～	
発生時の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 幼虫が葉の表皮を残して食害する。 5月中旬から成虫が見られている。 5月は高温傾向で推移していることから、6月上旬から幼虫の発生に注意が必要である。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> ほ場内外のあぶらな科雑草をこまめに除草する。 トンネルかけの場合は、雑草によりネットが持ち上がるため、除草も併せて実施する（写真右参照）。 品目により薬剤の登録状況が異なるので、ラベルを確認してから使用する。 ジアミド系（プレバソンフロアブル5等）への薬剤抵抗性個体群の出現があり、防除効果が劣る場合は他系統の薬剤に切り替える。 		

作物名	いちご	
病虫害 生理障害名		
ハダニ類		
発生状況	少発生	
発生時期	5月下旬～	
発生時の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 発生初期には下葉の裏に発生することが多く、発生に気づくのが遅れがちになる。 寄生数が増加し被害が激しくなると葉の縁が暗赤色から褐色に変わる。 発生が激しくなると、被害は株を中心に広がり収量に大きく影響する。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> 春期の下葉取りは発生源を減らすのに有効 各種管理作業中にハダニ類の寄生および被害の発見につとめ、早期防除に努める。 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤は連用しない。 		
<防除の一例> ●ダニサラバフロアブル 1,000倍 収穫前日まで 2回以内 ●ニッソラン水和剤 2,000～3,000倍 収穫前日まで 2回以内		

作物名	きゅうり・すいか・メロン	
病虫害 生理障害名	アブラムシ類	
発生状況		
発生に注意		
発生時期	6月中旬～	
発生時の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 葉の裏に群生し、吸汁害による莖葉の萎凋、排泄物による葉や果実の汚染が発生する。 ハウス内は温度が高く、露地よりも増殖が早いので注意する。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> ほ場をよく観察し、発生初期の低密度のうちに防除する。 薬剤抵抗性の出現を防止するため、同一薬剤は連用しない。 ミツバチを放飼しているほ場では、薬剤散布を控える。 		
<防除の一例> ●チェス顆粒水和剤 きゅうり 5,000倍 収穫前日まで 3回以内 すいか・メロン 5,000倍 収穫3日前まで 4回以内 ●モスピラン顆粒水溶剤 きゅうり 2,000～4,000倍 収穫前日まで 3回以内 すいか 2,000～4,000倍 収穫3日前まで 3回以内 メロン 8,000倍 収穫3日前まで 3回以内		

作物名	すいか・メロン・きゅうり	
病害虫生理障害名		
ハダニ類		
発生状況	すいか	
	少発生	
発生時期	きゅうり	
	5月下旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 葉の裏に寄生し、吸汁により葉の表に白いかすり状の斑点が現れる。増殖すると葉全体が黄変枯死する。 高温乾燥を好むため、ハウスでは露地よりも早く発生する。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> ほ場をよく観察し、発生初期の低密度のうちに防除する。 ハウスでは、侵入しやすい出入り口やサイドなどの開口部付近を中心に、よく観察する。 薬剤抵抗性の出現を防止するため、同一薬剤は連用しない。 		
＜防除の一例＞		
●ピラニカEW		
きゅうり	2,000～3,000倍	収穫前日まで 1回
メロン・すいか	2,000～3,000倍	収穫3日前まで 1回
●マイトコーネフロアブル		
きゅうり・すいか・メロン	1,000倍	収穫前日まで 1回

作物名	すいか・メロン・きゅうり	
病害虫生理障害名		
菌核病		
発生状況	菌核病菌が検出されたすいかの葉の症状(H28.5.11)	
	少発生	
発生時期	5月中旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 茎や果実の花落ち部に白色のかび(菌糸)を生じて腐敗し、黒色の菌核を形成する。 20℃前後の比較的低温が続き、多湿の場合に発生が多くなる。 すいかやメロンでは、着果期を過ぎ茎葉が繁茂したハウスで発生が多くなる。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> ほ場周囲に明渠を設置するなど、排水改善に努める。 過去に発生したほ場では、観察を十分に行い、早期防除に努める。 換気を心がけ、ハウス内湿度の低下に努める。 被害茎葉や果実は見つけしだい除去し、ほ場外へ搬出する。 		
＜防除の一例＞		
●スミレックス水和剤		
すいか	1,000～2,000倍	収穫7日前まで 5回以内
きゅうり	1,000～2,000倍	収穫前日まで 6回以内
メロン	2,000倍	収穫前日まで 3回以内
●カンタストライフフロアブル		
すいか・きゅうり・メロン	1,000～1,500倍	収穫前日まで 3回以内
※スミレックスくん煙顆粒は、メロンには登録がないので注意しましょう。		

作物名	たまねぎ	
病害虫生理障害名		
ネギハモグリバエ	5月28日 → 発生初期の症状	
発生状況	発生に注意	
発生時期	5月下旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 5月下旬から第1回目発生が見られる(写真上)。 発生初期は葉身に縦並びの白色小斑点(写真上)を生じる(成虫の食痕・産卵痕など)。 幼虫がふ化し、白色すじ状の食害が拡大する(写真下)。 葉数の少ない株では著しい生育不良や枯死株が発生する。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> 白い線状の幼虫被害が発生してからでは、防除効果が得られにくい。 成虫の食痕を観察し、食痕を観察したら速やかに薬剤防除を行う。 葉身全体に薬液が付着するよう、展着剤を加用する。 		
＜防除の一例(2回目以降)＞		
●リーフガード顆粒水和剤 1,500倍 収穫3日前まで 3回以内		
●ディアナSC 2,500～5,000倍 収穫前日まで 2回以内		
※ いずれの薬剤も展着剤を加用する(まくひか等)。		

作物名	ねぎ	
病害虫生理障害名		
ネギアザミウマ	令和元年5月29日撮影	
発生状況	少発生	
発生時期	5月下旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> 5月下旬にハウス軟白作型で発生が確認された。 加害を受けた葉は白いかすり状の斑点を多数生じ、葉の表面や基部に淡黄色や淡褐色の1mm前後の微少な虫が見られる。 高温少雨の気象条件で多発し、繁殖力が旺盛で短期間に密度が上昇する。 		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> ほ場を観察し、発生初期の低密度時から殺虫剤を散布する。 合成ピレスロイド剤抵抗性個体が全道的に確認されているので本種の防除には使用しない。 		
＜防除の一例＞		
●ディアナSC 2,500～5,000倍 収穫前日まで 2回以内		
●アクタラ顆粒水溶液 1,000～2,000倍 収穫3日前まで 3回以内		
●ハチハチ乳剤 1,000倍 収穫7日前まで 2回以内		
※ いずれの薬剤も展着剤を加用する(まくひか等)。		

作物名	トマト類（大玉・ミニ・中玉）																	
病害虫生理障害名	 																	
すずかび病																		
発生状況	初期の葉表の病斑																	
発生に注意	葉裏のカビ 上：葉かび病 下：すずかび病 (病徴では判別困難)																	
発生時期	6月上旬～																	
発生の状況・要因																		
<ul style="list-style-type: none"> 定植直後から発生が見られる場合もあり、昨年発生したほ場では発生する可能性が高い。 生育適温は26～28℃で、高温多湿条件下で発生しやすい。 発生は下位葉に多く、葉かび病とよく似た病斑を形成する。 葉裏には葉かび病に比べて、平面的でやや色の濃いかびを生ずるが判別は難しい。 																		
対策																		
<ul style="list-style-type: none"> 整枝や摘葉により通気性の確保に努める。 発生前から予防的防除を定期的に行う。 発生が見られた場合は、被害葉の除去と治療効果のある薬剤での防除を行う。 																		
<p><防除の一例></p> <ul style="list-style-type: none"> ●ダコニール1000 <table border="1"> <tr> <td>トマト</td> <td>1,000倍</td> <td>収穫前日まで</td> <td>4回以内</td> </tr> <tr> <td>ミニトマト</td> <td>1,000倍</td> <td>収穫前日まで</td> <td>2回以内</td> </tr> </table> <発生確認後の防除の一例> ●ファンタジスタ顆粒水和剤 <table border="1"> <tr> <td>共通</td> <td>2,000～3,000倍</td> <td>収穫前日まで</td> <td>3回以内</td> </tr> </table> ●シグナムWDG（混合剤） <table border="1"> <tr> <td>共通</td> <td>2,000倍</td> <td>収穫前日まで</td> <td>2回以内</td> </tr> </table> 			トマト	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	ミニトマト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	共通	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	共通	2,000倍	収穫前日まで	2回以内
トマト	1,000倍	収穫前日まで	4回以内															
ミニトマト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内															
共通	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内															
共通	2,000倍	収穫前日まで	2回以内															

作物名	トマト類（大玉・ミニ・中玉）												
病害虫生理障害名	 												
葉かび病													
発生状況	少発生												
発生時期	5月中旬～												
発生の状況・要因													
<ul style="list-style-type: none"> 一部で発生が見られている。 気温20～25℃の多湿条件下で発生が多くなる。 着果負担や肥料切れにより草勢が衰えてくると発生しやすい。 密植、過度のかん水は発生を助長する。 													
対策													
<ul style="list-style-type: none"> 追肥遅れ等により草勢が低下することがないように着果状況に合わせた栽培管理を行う。 発生前からダコニール1000や微生物農薬を中心とした予防的防除を定期的に行う。 発生が見られた場合は、被害葉の除去と下記の治療効果のある薬剤等での防除を行う。 													
<p><発生時の防除の一例>（大玉・ミニ・中玉共通）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●トリフミンジェット <table border="1"> <tr> <td>50g/400ml（床200m×高さ2m）</td> <td>収穫前日まで</td> <td>5回以内</td> </tr> </table> ●ファンタジスタ顆粒水和剤 <table border="1"> <tr> <td>共通</td> <td>2,000～3,000倍</td> <td>収穫前日まで</td> <td>3回以内</td> </tr> </table> ●シグナムWDG（混合剤） <table border="1"> <tr> <td>共通</td> <td>2,000倍</td> <td>収穫前日まで</td> <td>2回以内</td> </tr> </table> 			50g/400ml（床200m×高さ2m）	収穫前日まで	5回以内	共通	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	共通	2,000倍	収穫前日まで	2回以内
50g/400ml（床200m×高さ2m）	収穫前日まで	5回以内											
共通	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内										
共通	2,000倍	収穫前日まで	2回以内										

作物名	トマト類（大玉・中玉・ミニ）																	
病害虫生理障害名	 																	
灰色かび病	芽かき部より茎で発生																	
発生状況	果梗部に発生したかび																	
少発生																		
発生時期	果実での発生																	
4月下旬～	令和元年5月29日撮影																	
発生の状況・要因																		
<ul style="list-style-type: none"> 果実での発生は少ないが、茎葉や果梗部でのかびが散見される。 枯死部分や芽かきの傷口から感染してかびを生じ、茎葉や果実等に広がる。 がくや果頂部に残った花弁からの発生も多い。 発病適温は20℃前後で、多湿時や結露等で濡れた状態が続くと発生が増える。 																		
対策																		
<ul style="list-style-type: none"> 早朝からの換気により、湿度の低下に努める。 芽かきや誘引作業、摘葉を遅れず実施し、通気性を確保する。 枯れた花弁や被害茎葉・果実は見つけ次第除去し撤出する。 菌性菌発生リスクが低いダコニール1000やベルコートフロアブル、微生物剤等による予防的防除を実施する。 発生確認後、数日間の曇天や降雨が予想される場合は治療効果のある剤での防除を実施する。 																		
<p><防除の一例></p> <ul style="list-style-type: none"> ●ダコニール1000 <table border="1"> <tr> <td>トマト</td> <td>1,000倍</td> <td>収穫前日まで</td> <td>4回以内</td> </tr> <tr> <td>ミニトマト</td> <td>1,000倍</td> <td>収穫前日まで</td> <td>2回以内</td> </tr> </table> ●アフエットフロアブル <table border="1"> <tr> <td>共通</td> <td>2,000倍</td> <td>収穫前日まで</td> <td>3回以内</td> </tr> </table> ●ファンタジスタ顆粒水和剤 <table border="1"> <tr> <td>共通</td> <td>2,000～3,000倍</td> <td>収穫前日まで</td> <td>3回以内</td> </tr> </table> 			トマト	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	ミニトマト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	共通	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	共通	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内
トマト	1,000倍	収穫前日まで	4回以内															
ミニトマト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内															
共通	2,000倍	収穫前日まで	3回以内															
共通	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内															

◆農薬の使用に当たっては、使用基準を必ず守りましょう。なお、品目ごとの栽培防除体系を基に減農薬でクリーンな野菜生産を実践しましょう。
 ◆防虫ネット・近紫外線カットフィルム・粘着シートなどを活用し、適切な栽培管理と合わせ、病害虫の発生を最小限に抑制しましょう。

◆この情報は、上川農業改良普及センター本所地域（旭川市、鷹栖町、当麻町、比布町、愛別町、上川町）向けに作成されています。
 気象・土壌条件・作業体系から当該地域以外には、適用されませんので十分ご注意ください。
 （不利益・損害などが発生した場合、当方は責任を負うことはできません）
 ◆掲載されている農薬情報は、令和元年5月30日現在の登録内容となっていますので、活用の際は、あらかじめ安全使用基準を確認くださいますようお願いいたします。

■□■□■□■□■□ GAP手法の活用 【農作業事故編】—農作業事故の防止は日頃の安全確認から— □■□■□■□■□■

- 作物の管理だけでなく、作業者の体調管理にも気を配りましょう。
- ハウス内の作業だけでなく、炎天下や熱のこもりやすい場所での作業時は家族等に居場所を伝え、常に連絡が取れるよう携帯電話を携帯しましょう。
- 果菜類など、作物で視界が遮られるような場所では、ラジオを携帯したり、作業仲間同士の声かけを行いましょう。
- 体調不良時は無理な作業を控えましょう。また、作業時は定期的な休憩と水分補給を忘れずに行いましょう。
- 事故発生時は速やかに安静な状態を確保し、適切な処置を図りましょう。